

〈報告(4)〉

機能的地域資源としての大学の役割 —高齢者支援の経験から—

土田宣明
(文学部教授)

高齢者支援の経験から大学がどのような役割を果たすことができるかを報告したいと思います。これまでの経緯を報告させていただきます。高齢者支援の基本的な考え方。組織の特徴。大学という地域資源の中でどんな点がうまくいっているのか。最後に課題として今後、残されている問題点として、こんなことがあるのではないかとということ報告させていただきたいと思います。

高齢者支援の基本的な考え方というのは、発達心理学者で有名なヴィゴツキーの理論と関係します。「人間の高いレベルの精神機能は、もともとその人に内在するものだけではなく、社会的に形成されたものだ」というものです。これが高齢者支援の中でも重要な考え方となっております。一言でいうと、高いレベルの認知機能、精神機能は社会性の中で発生するのではないかと。これはもともと、発達の前半期についていっていることですが、高齢者からいうならば高いレベルの認知機能は社会性があるところで維持・改善されるのではないかと、その可能性があるのではないかとということです。発達の前半期をみてもみますと、認知機能は子どもとかかわりながらコミュニケーションを通して徐々に言葉を獲得し、それが高いレベルの認知機能を獲得するに至ります。一方で加齢により高齢者の精神機能が少し弱まってしまう時、もう一度、社会性の中でコミュニケーションを維持しつつ、高次精神機能が維持、改善できるのではないかと考えております。これが我々のチームの基本的な考え方となっております。

音読計算活動を実践しました。週1、2回、地域の高齢者の方に大学にきてもらって30分程度の音読、計算活動に参加していただきます。それを通して双方向的なコミュニケーションが生まれます。音読、計算自体もいいと思われませんが、音読、計算活動を媒介にしながらコミュニケーションをとるきっかけに

なるところに意味があります。参加者と支援者の間のコミュニケーションが高次の精神機能に可塑性的変化を生み出すのではないかという仮説です。これまでの経緯ですが、高齢者支援チームは高齢者施設で実践を始めました。2002年に施設で実践を始めて、もともとは要介護者の方を対象にしています。これは現在も続いています。それがいい効果を生んだことから今度は大学周辺の地域の方にオープンにして施設から地域へ、立命館大学と北区周辺の方、京都市と連携しながら施設から地域へと活動を展開しております。この建物の2階にトレーニングルームがあります。音読、計算する場所を設定して、歓談室があって、ゼミ室のように歓談室に待機していただいて、実際には学習室で音読、計算をしながら5分～10分くらい、あとの20分はおしゃべり、コミュニケーションをとっていただくという取り組みです。歓談室の中にもパズルが用意され、大活字本も用意しました。本を読みたいが字が小さくて読みづらいという時に大活字本が好評で、図書コーナーを用意して貸し出しも試みました。いくつかブースを用意して次から次に30分1ワークで代わっていきます。このような取り組みは施設から大学に移って、京都市との連携も進んでおり、北区、左京区、伏見区の施設職員の方々も見学にきていただいています。そういう連携が今、進んでおります。

高齢者支援チームは吉田先生を代表とする教員3名、地域サポーター、市民しんぶんを通して応募していただいた地域のサポーターの方、文学部のインターンシップの制度を利用して高齢者支援チームに参加している学生たちから構成されています。中核となるのが人間科学研究所の客員研究員の方々です。教員を含めて運営委員のチームをつくって毎月運営委員会で問題点を出し合いながらチームを運営しております。人間科学研究所の客員研究員の方は、応用人間科学研究科の対人援助、臨床心理のコースを出られた社会人の方が多くいらして、中核にいてくださっているので組織として成り立っていると感じております。

大学という地域資源の中で人的・物理的・情動的資源ということを考えてみるならば、人的資源は学生、大学院生、文学部のインターンシップが中心です。しかし、一方で継続性が期待できない側面もあります。学生や院生は代わっています。人間科学研究所の客員研究員の皆さまや地域の住民の方々は逆に継続性が期待できる。この取り組みにも初期から参加してくださっている方が多くなっています。人的資源の中の継続性の問題が、今後、重要だと思っております。

す。

物理的資源として、大学という中で、場が設定されることは大きいと思います。大学は交通網の中に位置づけられやすいです。衣笠キャンパスという交通網の中に位置づけられ、場も設定しやすいです。空き教室とかトレーニングルームも確保されていることは大きな利点だと考えています。しかしセキュリティの問題などで場が設定しにくくなっていることもあります。今後の課題の一部ではないかと思っております。

課題に関しては、サトウ先生のお話にもありましたが、データの蓄積と保管について今後大きな問題になるのではないかと考えています。高齢者支援チームも毎年、膨大な個人データが蓄積されていきます。卒論の学生、修士論文の学生もここで実験とか調査を行っていますので、いろんなデータが蓄積されていきます。それをどういう形で保管、管理していくのか、特に連携機関と情報を共有していくのか、今後の課題として試行錯誤が続くのではないかと考えております。サトウ先生の言葉を借りれば「情報倫理から情動的正義へ」ということですが、これが高齢者支援チームにとっても大きな今後の課題としてあると思っております。以上で終わらせていただきます。